針葉樹會報

通卷第八十四號

豊田忠巍君からの手紙

前略御免下さい。

卒業以來一向に御無沙汰に打過ぎ、洵に御申譯もございません。偏に御海容願上げます。大兄初め針葉樹會の皆樣には相變らず御健在の趣、何よりの事に存じます。不幸にして小生昨年十月濕性肋膜炎を發して以來會社を休み、唯今も自宅で靜養中でございます。然しもう殆んど全快致しましたので七月早々出勤の豫定で居りますから、御放念下さいまし。

針葉樹會報も毎回助川の方から回送を受けて居りましたが、之を病床で拜見する時は又格別の感慨を覺える樣でございます。小生在學中所謂「先立つもの」が乏しくて、山にもスキーにも殆んど出られませんでしたが、「サラリーマン」になってからは、どうやら懷具合もよくなりましたので、正月休（四日間）とか三大節及び一年に十日間許されて居る公休（勿論日曜日以外）を極度に利用してスキーや山に出て居ります。

工業會社の事とて、仲間の全部（どうも事務やはあまり運動を好まない樣です）がエンヂニヤーでして、スキーにしても山登りにしても仲々理論的に頑張る人達が多く、殊にスキーを折つたりしたら大變なもので、宿に歸つてから高等數學の公式で計算までする騷ぎです。それでも斯ふ云つた仲間は氣分のいゝ人達ですので、何時も學校の連中と一緒に居る樣に愉快にやれます。會社には山岳部もありますが、これは正月休にズブの素人にスキーを樂しませる事を仕事にして居りますので、玄人と自認して居る連中は、夫々のグループを適當に纏めあげて、各々別行動をとつて居ります。

Aクラス、Bクラス等と云つた具合になるのですが、之も一人ぎめで皆自分達

がAクラスと自負して居る樣です。そして八ミリなど持出して、妙技特に七轉八倒の怪技を演じてシーズンアップに公開したり、相當お盛んなものです。

尙何より好感のもてるのは、例のニヤケタ銀ナガシスキーヤーが日立には一人も居らぬ事で、さうかと言つて無理にきたならしい風体もして居りませんので、つき合ひよい樣です（腕の方も大同小異ですから殊更ですが）。會社の連中は志賀高原によく出掛けますが、日歸りスキーには「半泊」「急行」を活用して五色に參ります。但し月曜は屁張つて、精神朦朧、電話が遠くて聞えない有樣ですが、性懲りもなく又出掛ける樣です。

近藤さんの大牟田（でしたか）紹介の一世の名文を拜見して「大牟田も相當なものだが日立も日立だ。一つ滅茶苦茶にこきおろしてやれ」と考へましたが、到底この大先輩の樣な名筆を振ふ事は出來ず、何さかどさくさ紛れに先輩の驥尾に附して一氣に書きなぐらうと思つて居ました。ところがまだそのシッポに摑らない中に、天網恢々疎にして漏さず、天罰覿面、鑛毒SO_2だかSO_3の亞硫酸ガスにあてられて病床に倒れてしまひました。

從つてこの謀叛は當分延期です（九ヶ月間只で養つて呉れて居る會社に幾分濟まないと言ふ佛心もありますので）。兎に角近代重工業の一翼を形成して居る日立ですから、機會がありましたら是非御立寄り下さい。尤も工場見學は最近喧しくなりましたので、容易でない樣ですが、どうせそんな事はどうでもいゝのですから御來遊願ひます。如水會員も工場だけで二十名以上居りますが、入營、應召等で半減して居ります。針葉樹會の皆樣にも宜しく御申傳へ下さい。

先づは御無沙汰御詫び旁々近況御知らせまで。亂筆御赦し願ひます。さようなら。（仙臺にて、六月二十二日附、編者宛）

山戀ひの歌

柿原生

故鄕の八十の山尾根紅葉して、夕陽の空に蔭深みたり

眞澄み立つ安曇の山の荒肌に、生れ來つるらむ駒草の花

おゝ山よ崇く聳えよわれはしも、なれを恃みて生くべきものを

吹きつくる霧の强きは山の背の、間近に來しか雷鳥の澤

今日も亦劍は濡れて別山の、尾根に這ひ行く深き霧あり

里行きて雪路い行きて奥の嶺に、此の日迎えし山友偲びつゝ

地圖面を眺めつゝ想ふ吹雪する、越後苗場に小舍居す人を

山友が皆赤城に立つ日雲低く、雪降らむとす寒に入れるなり

今宵しも山友みな赤城訪ふとふに、ひさり病にわび寢すわれは

想ひ出は淡く浮べり小諸なる、信濃の驛(うまや)ゆきすぎがてら
信濃嶺と秩父の嶺をならべ見つ、おごそかに想ふ在りし日の秋
秋の日の曲折(つゞれ)路降り行く山友の、肩越しに見し栃本の宿

× × ×

編輯をすべき身なるに歌載すと、友に言はれぬKならなくに
Kと言ふ男ありけむ歌を讀む、あかし給はれKならぬ御名
名乘らでも歌は讀み得むさり乍ら、Kに當てらる男しあるを
その昔東の武士よ戰場(いくさば)の、名乘り誇りて散り行けるもの

（編註・昭和十二年—十三年頃の作ならむ）

回想の山小屋欄

増山清太郎

記念撮影

會報八十三號にクマさんが、西吾妻の若女平で小生の寫眞に異變の起つたことを報じてゐる。これはどうやら、この時の記念撮影に彼氏の體が縱に半分しか入らなかつた事實を指すらしい。處が豈はからんや、彼氏が小生を寫して吳れた方は全然寫らなかつたのである。これぢやあ、どつちが奢つて貰つたらよいだらう。尤も彼氏に言はせればチヤンと寫つてゐるのださうだが、見せない處を見ると、チト眉唾ものだ。

勞働價値

これも春の吾妻。新五色の宿屋は、二人の爲に、人夫を二日使ひ、一晩小屋に泊めて、二度食事をさせて、一切で金參圓也を要求した。米澤の郊外で、川原に灯を翳して、泥鰌を刺してゐる男がある。一晩かゝつて一升程刺すのださうだ。凡そ吾人の算盤で彈き出せないのが東北の勞働價値である。孫さんが東北にお出掛けになると國策の一端東北振興に役立つとは、一理なきに非ざる、說と知るべし。

可？ 不可？？

岩手山頂上のお宮に泊めて貰ふ。堂守に、「此處ではナマグサものを食つてもよいか」と尋ねたら、「女人禁制の當山では、ナマグサものを食つてはならない道理だが、御承知の通り當今は女も山に登ることだから、ナマグサの方も大目に見てやらう」と答へる。だが聽き樣によつては「……御覽の通り此處には女は居ないのだから、ナマグサものも遠慮して貰つた方が隱當だ」といふやうでもある。聽き返せば前と全く同じことをペラ〳〵囀る。下手なことをして追出されもしたら損だと思つて、先方の出した物をモツ〳〵食つて置いたら、翌朝になつて、咄！ 罐詰の鯨を食はせた。

或る婦人登山者

長田秋濤譯、明治三十三年春陽堂發行「ヒマラヤ山探險」といふ本がある。或る婦人が夫と共にシムラから、クル・ラフアール方面へ旅した紀行であつて、著者は記してない。内容から推してアルース夫人のやうであり、時代からしてウロックマン夫人のやうでもあり、或は全然名もない人かも知れない。ヒマラヤに暗い小生には判らないが、望月君にでも見て貰つたら、おぢきに知れることだらう。

詩人と科學者

日曜日に教會に集つた人々が、家に歸る頃に雨が降つて來た。傘を持つてゐた一人の若者は、近所に住むうら若い女性を相々傘で送つてやつた。偶然にも二人の母親は、その時こそ交渉の無い生活を送つてゐたが、實は幼な友達だつたのであつた。かくして二人の間には交渉が始まり、互に愛し合ふやうになつたが、しかしハッピー・エンドには到達しなかつた。若者は後のサー・ウオルター・スコットであり、女性は、ジェームス・デビッド・フオーブスの母である。しかも、有名なロックハート著「スコット傳」の中に、詩人終生の親友として出て來るサー・ウイリアム・フオーブスこそは、ジェームス・デビッドの父なのである。

メルクルを憶ふ

Willy Merkl (1900—1934)

フリッツ・ベヒトルド

三十五年の短い生涯を通じて、ウイリイ・メルクルは常に高峻な山々に大志を懷いてゐた。彼がナンガ・パルバットで最後の息を引き取る迄、運命は彼にとつて惠まれたものであつたと云へよう。登山者としての彼の經歷は宛然許多の著名な登攀の連鎖でもあつた。そして遂に彼がその王座に到達せんとした時、勝利の門口に於て悲劇の手が彼の生命を奪つて了つたのである。ナンガ・パルバットの光輝燦爛たる雪嶺は、彼が最も親密であつた三人の友、ヴイロ・ヴェルッエンバッハ、ウイリ・ウイーラント、アルフレッド・ドレクセルと六人の勇敢なる人夫と共に、永却に彼を抱き守つて居るのである。

ナンガ・パルバットの悲慘事の後、私達が下方の天幕を撤收した時は、メルクルと私との最初の登攀から數へて丁度廿年の歳月が流れて居た。その廿年間と云ふものは常に輝やける青春の月日であり、故郷ドイツの山々からナンガ・パルバットの玉碎的な終曲に終る壯麗な山岳の交響樂にも喩へる事が出來る。枚擧に暇ない程私達の間に登山綱は結ばれ、何時も私達は一身同體であり、又その目的も全く一致してゐた。そして私達の計畫を決定して吳れるのは常にメルクルの組織的な天性であつた。新らしい登攀をする度に私達は前の足場よりも高い足場に持ち上げられ、そして然も彼は決して私達の肉體が耐え得られない樣な又私達の登攀能力を以てして成就し得られない樣な無暴な目的を立てた事はなかつた。

彼は先づ第一に立派なクラッグスマンになつた。彼の名前はカイザア・ゲビルゲの荒涼たる峯々の峽間に鳴り響いた。そして彼は次の樣な有名な登攀を繰返しては成功した。即ちフライシュバンクの東面、トーテンキルヒルの西面直登、クライネ・ハルトの

北面及北西面、デュルフア・チムニイ、プレデイグトスツールの西尾根、「シューレ・ダイム」ルートの第二横斷等である。

山は彼の生活を滿たし、又彼をして同僚の間で最も誠實な、最も信頼すべき者となした。友情こそは指導精神の眞の鍵である。彼の最後のあの偉大な登攀に際して彼は良き友であつたと同時にリーダーでもあつた。之は彼の誠實な日常生活から生れたものである。彼は準備に際しては完璧を期し、計畫を樹てるに注意深く然も一度行を起すやその決心は恐る可きものがあつた。即ち彼は細心の注意を以つて選擇したが、大膽勇敢に行動した。

かゝる精神を以て彼は亦その職務を立派にやり通した。彼が技術檢査官として居た獨逸鐵道省に於ては同僚にも上役にも齊しく高い尊敬をうけた。而も職務の間に暇さへあれば憧れの山懷へ飛び込んで行つた。かくして彼の面目をいやが上にも高からしめたかの東部アルプスに於ける許多の重要な初登攀が行はれた。即ちミユウルストルツホルンの身の毛もよだつが如き南壁、ザアウホルンの北尾根、ロトホルンの堂々たる北面バットレス等々。彼の長き登山旅行は又ベルシユテスガーデンのアルプス、ローフア・ローガング、タンハイム、ウエツターシタイン、カールウエンデル、ゴザンク山脈、シユウツセルカールシユピツツエの南面、ラリデルラーヴアンドの北面、ドウームリンクの第五登攀、グロース・ビスショフスミユツエ南面の第三登攀、等々のものを含むである。一九二四年に彼は始めてドロミテを、緑り濃き牧場よりすつくとぬき立つて聳ゆる赭き岩峯、困難な登攀の後南國の麗はしい風景が眼の下遙かに繰り廣げられる、あのドロミテを訪れた。

續いて三夏彼はドロミテに行つた。そしてクラインステ・チンネの「プリユスリツス」に精通し、トーレ・デル・デイアヴオロの第二登頂をなし、プンタ・シヴエツタの南面の初登攀、次いで同峯の北尾根の初登攀をなした。一九二六年にはパラ連峯に戰を挑み、其の地方で三つのラスタイ・タワーを通過し、シマ・デイ・カムピイドの北西壁を横切つて彼の進路に戰つた。

メルクルは次いで氷雪の山々に登攀を行つた。多くの休日が西部アルプスに於て幸福に費されていつた。彼はドフイーネ、ベルニナ、モン・ブラン、ヴアリス、ベルニーズ・オーバーランド等の山群を訪れた。一九二七年には多年の宿望メイジユに滿喫し、一九二八年には私達はペトレ山稜よりモン・ブランを陷しいれた。第一流の登山者、穩謙にして腰の低いこの登山者は、深刻な渇仰の念を以て山々に接近していつた。今彼の日記から一節をぬいてみよう——「驚異と敬虔の念に滿ち滿ちて私達は雄渾な山々の神祕な空間に突入し、頭上には幾千萬とも數知れぬ星辰を戴いて露天に横臥し、そして未だ曾つて知らざりし寂寥の幸福を犇々と感ずる事を覺えた。」

乍然彼は決して一個の夢想家ではなかつた。彼は決して過去の憶ひ出にのみ耽つては居なかつた。すぐその後彼がアルプスの彼方遙かに眼を見はつた事は決して不思議ではなかつた。職務上の又經濟上の困難にも拘はらず、彼は中央カウカサス山脈の横斷に成功した。一九二九年にウイリイ・メルクル、ウオールター・レーヒル及び私はロシアに向けて出發した。計畫は豫定通り完全に成功したと云ひ得る。その功績は自ら計畫し準備をしたメルクル

に歸す可きものである。

私達はギウルチよりエルブールズに至る長大なプログラム中の總ての峯々を登つた。コシュタンタウの北尾根は初めて征服され誇らかなウシュバは第三登頂を許したのである。

右の樣な登山の經歷を持つた者はヒマラヤやカラコラムの巨峯と千戈を交える資格を充分與へられたものであらう。曾つて彼の眼前に在つた英國や獨逸の先驅者達の偉大な業績を參照して、一九三一年彼はその友ヴィロ・ヴエルツエンバツハとヒマラヤの計畫を始め、一九三二年には七人の登山家を率ゐてナンガ・パルバツトへ赴むいた。勝利は彼等を拒むだ。訓練の無い人夫共は彼等の進行の邪魔ものとなり、加ふるに猛吹雪は人夫達を第七天幕より追ひ歸へして了つた。併し貴重な偵察が成し遂げられ、絶頂へのルートが發見されて、メルクルは故國へ一旦歸へつてから卷土重來せんものと思つてゐた。

登山者としての彼の交友の範圍も次第に擴張した。獨墺山岳會墺太利山岳會、英國山岳會、ヒマラヤ山岳會等の會員としてメルクルは眞の登山家であり、行爲に際しては勇敢である一方、友人間ではすこぶる謙讓であつた。彼は至つて無口であつたがものゝ急所はしつかり摑まへた。かくして歸國するや直ちに彼は第二回目のナンガ・パルバツト攻擊の爲に前の時よりも更に優秀なパーティの編成を準備しはじめた。彼の熱意は鐵道省の人々を動かし周圍の人々の援助の御蔭で遠征に必要なだけの金員を得る事が出來た。そして多くのドイツ登山家の中から十人の者が彼の計畫に賛成し團結したのであつた。

ナンガ・パルバツトは彼を要求した。登山史の中で未だ起つた事のない無類の悲慘事に彼は倒れて了つた。敗北と勝利とは全く紙一重の差である。偉大なる先蹤者、かのマンメリイが横はれる同じ氷雪の峻峯に、彼はその仲間と共に今は保らかに憩ふて居るのである。（「ヒマラヤン・ジャーナル」第七卷（一九三五年）の追悼欄より。）

—望月達夫譯—

（追記）メルクルの遺骸は、それから四年後一九三八年の獨逸ナンガ遠征隊によつて發見せられたと報ぜられてゐる（譯者）

會員通信

○柿原謙一君より（六月十三日附　編者宛）

御無沙汰しました。針葉樹會報第三號を秩父の家で送つて吳れましたので、久方ぶりに懐しく讀みました。相變らず例會が催され依然として諸兄の御出席の樣を想ひ浮べますが、何となしに別世界の樣な感じがしてとても淋しい感情が湧きます。

鷹野兄既に北支にあり、そして又松木大先輩も北支に行かれし由、この次には神主こと謙坊が日本刀をヒツサゲて玄海灘を渡る順番ですよ。津布久で作つた例の登山靴でも佩いてシンズ〳〵と大陸の地を踏む日も余り遠くはないでせう。

本月下旬に村山・箱根ヶ崎・所澤の方面へ野營に參ります。梅雨期なので降られるでせう。立山で降り込められて黑百合の異樣な香に一驚したことがありましたが、今度は又天幕の中で飯でも炊いて山を偲ぶことにします。皆さんに宜敷く。六月一日

伍長になりました。

山岳部報告（五月）

記錄

(1)谷川岳市の倉澤天幕生活（五、二六—二八）

船本　日江井　山田　久保　佐藤政　根本　林　佐藤眞　小柳
高野　關岡　鈴木　他一名

新しく部員になつた連中をつれて、何處へ行かうかと思案したが、豫科の連中が谷川へ行かうと云ひだし天幕を使用した。二五日夜、日江井、鈴木の外十名出發、豫定はマチガ澤であつたが人が居て駄目なので天幕は市の倉の出合に張り、その日は奥までつめてグリセードと岩登りの練習。

二七日、後着二人を加へ十二人マチガ澤をつめる。結局トマ、オキの中間に出たが最後は相當急であつた。

二八日は芝倉澤をつめ國境尾根からグリセードをやりつゝ歸幕天幕を撤收したゞちに歸京す。

この行仲々皆頑張りを見せ頼母しき限りであつたが、たゞ頻々たるスノーブロックの崩落や隨所にある巨大なクレヴアスは余り感じがよくなかつた。

(2)三峠岩登り練習（五、二八）　大塚　深谷　清水

小沼で四百人位下りたのには驚いた。しかし岩登りをやる人は三、四パーティのみ。

日誌

五、五　集會　本科三名　豫科四名　專門部一名

五、一七　集會　本科三名　豫科九名

記念祭も終了し豫科は元氣一ぱい。豫三に左の新部員加入す。

林正敏　小柳英二郎　佐藤眞一

五、二四　集會　本科五名　豫科六名　專門部二名

谷川行を正式決定。種々準備をなす。

五、三一　集會　本科五名　豫科六名　專門部二名

夏山の合宿地穂高涸澤につき新人のため説明をなし、大体の參加人員を調査す。

記錄

○世附（ユヅク）峠と世附川　山口稔一　鈴木英雄

駿河—柳島—世附峠—淺瀬—落合—神繩—（バス）—駿河

昨二十八日（五月）右の地に遊びました。ユヅクと言ふ音から來る何となく好ましい感じに心ひかれて行きましたが、世附川の谷は兩側の澤からの宕石の崩壞甚しく、實に荒涼たるものがあります。地圖で想像するよりも遙に雄大な谷です。

○鹿留山（五月二十八日）　望月達夫　他三名

下吉田—大明見—鳥打峠—飯盛山—鹿留山—内野峠—内野村—富士吉田

會社の連中とゆきました。鳥打峠から鹿留山迄の尾根は、中々痩せてゐて登り下りも強く、又内野峠の側も急で一体に路も良くありません。余り人の來ない所以でせう。内野峠近くの草原は實に廣濶としてゐて氣分のよい處、一度行く價値は充分あります。此處からの富士は申すに及ばず、御正体山が實に堂々と見られます。東京附近の低山の例に漏れずこの山も早春、晩秋

が良いでせう。

消息

五十嵐數馬君（新住所）兵庫縣西宮市常磐町二十二。

賢張　泰三君　四月十九日動員令下り、同二十七日新潟縣新發田聯隊に入隊さる。

（通信先）新潟縣新發田筒井部隊關口隊。

（留守宅）長岡氏長町一丁目一六七一番地。

豐田　忠巍君　通信先左の通り訂正。

茨城縣助川町日立製作所日立工場平澤寮内。

兵庫縣武庫郡甲東村甲東園アパート内へ轉居。

小谷部全助君　尙同君は四月末から歸阪して出勤の由。

堀岡清君歡迎針葉樹會　五月卅一日（水）於如水會館

（出席者）吉澤　磯野　久保田　手塚　增山　堀岡　林　小林　望月　森川　佐々木

突然上京した堀岡君を迎へる。余り急だつたので通知が徹底せず殘念だつた。優秀な物産社員として、天津、上海、青島へ飛び時局談の種を澤山持つてたられたので、それをうかゞふ。尙今夏七月末は大阪勢と共に神河内に這入る由。

近藤恒雄君歡迎會　六月十五日（木）於如水會館

出席者（會員）中川　吉澤　村尾　近藤　磯野　手塚　山口　增山　小柳　林　望月　森川　佐々木　榎本（部員）船本　原　大塚　日江井　山田　佐藤

元氣なコンチャンを圍んで夕食を共にする。先輩陣よりは夏のプランが出たり、又現役側からも今夏の計畫が發表された。

定例針葉樹會　七月六日（木）於如水會館

出席者（會員）吉澤　村尾　增山　小柳　松浦　佐々木

（部員）岩崎　船本　大塚　日江井　宮城　樫淵

夏のシーズンを前にした集り。現役は不日涸澤合宿へ出發する。

あとがき

山岳部では近く「針葉樹第十號」を刊行することゝなり、原稿は既に印刷屋の手に渡つてをります。本號の主要内容は、最近の現役諸君がひたむきに精力を集中した、前穗高奥又白谷側の登攀の記事であり、二年餘りの記録が添へられる豫定です。奥又白の研究は、今迄發表された何れのものより、更に權威ある勞作が出來上ることゝ思はれます。

針葉樹發刊に就き會員諸氏に御依賴致さればならぬことは、諸物價の騰貴により、本號は會員總ての方に一册宛御購入願ひ度いことで御座居ます。頒價壹圓也でありますから、何卒幹事望月達夫迄御送金下さい。右宜敷御高配の程願ひ上げます。

現役の連中は只今涸澤で合宿を致してをります。合宿解散後は、千丈澤生活（北鎌尾根）、烏帽子縱走、笠ヶ岳方面等の縱走に班を分ち、八月中旬は谷川岳生活、九月上旬は北岳バットレスと例によつて元氣のいゝ計畫を樹てゝをります。

×　×　×　×

今年は種々の都合により名簿の作成がをくれてゐますが。近く着手の豫定。住所御變更の方は何卒至急御一報下さい。

尙最近は原稿不足に惱むでゐますが、地方の諸氏よ！面白いニュースをお聞かせ下さい。

（七・一二）